

大蔵経の歴史とその背景

辛 尚 桓

The History and Background of the Tripitakas

Sangwhan SHIN

Abstract

This paper investigates the history of the *Tripitakas* in various Buddhist traditions. Literally, *Tripitaka* means ‘three baskets,’ *Sutra*, *Vinaya*, and *Abhidharma*; however, the term is used to refer to all of the Buddhist Canons, including the major commentaries of great Buddhist philosophers. Written in various languages, including Sanskrit, Pali, Chinese, Tibetan, Mongolian and Manchurian, these documents reveal Buddhist thought and languages, as well as several cultural aspects. The spread of Buddhism throughout various areas ultimately culminated in the composition of the *Tripitakas* as an amalgamation of national and international cultures.

The *Tripitakas* are generally divided into the Southern or Pali tradition, and the Northern or Chinese and Tibetan traditions. Previously handed down orally, the Southern tradition was only written down in the 19th century by the Pali Text Society, which transcribed the text onto palm-leaf manuscripts in Sri Lanka. The Northern tradition, so-called Mahāyāna Buddhism, is divided into the Chinese and Tibetan traditions. The wooden block printing that appeared in China in the 8th century provided the technology for the transcription of the Chinese *Tripitakas*. The *North Song Dynasty Edition* compiled in the 10th century was composed 1,076 sections, 5,048 volumes, and 13,000 printing blocks. In the wooden block printing period, the Korean tradition regarded the Chinese *Tripitakas* as orthodox; however, as the technology of typography developed, the *Daijō Tripitaka* was compiled. This was regarded as the most orthodox version until the last century. Another main stream of the Northern tradition, the Tibetan *Tripitaka* is well known for its massive volumes. Three times larger than the *Daijō Tripitaka*, these also preserve the later developed Indian Buddhism, especially Tantric Buddhism.

Both the Southern and Northern *Tripitakas* have been compiled and printed in modern book form since the last century, and have lately been re-edited for the internet generation. Thus, a computerized *World Tripitaka* unifying the different traditions can soon be expected.

1 はじめに

「三つのカゴ (Three Baskets)」の意味を持つ、トリ・ピタカ (Tri-pitaka) は、漢訳仏教圏では「三蔵」とよく称される「大蔵経」を指すものである。「三蔵」、すなわち、「三つの蔵」には、仏陀が45年間にわたり教え続けたといわれる、①経蔵 (Sutra Pitaka) と、②戒律および戒律の解説書にあたる律

蔵 (Vinaya Pitaka)、③経を初めとする多数の形而上学的な質問への答え・解釈といえる論蔵 (Abhidharma Pitaka) が含まれる。

大蔵経は、大乘仏教の根幹をなした、インドの龍樹と無着などの論師による多数の文献をはじめ、東アジア各国における論師の注釈も多数含んでいるため、仏教の思想・哲学などを直接反映しているものとされている。これをもとに、サンスクリット語、

パーリ語、漢訳、チベット訳、モンゴル語、満洲語など、多様な言語で訳された大蔵経は作られてきた。

こうした点から、大蔵経は、仏教思想をはじめ、各国の言語および「当代」の文化的特徴を把握するには、宝庫中の宝庫といえるだろう。

2011年6月、高麗大蔵経研究所主催により、「初雕大蔵経」の板刻が行われた1011年を記念して、「大蔵経千年記念国際学術大会」が韓国の大邱で開かれた。西欧における大蔵経研究者をはじめ、韓国・日本・中国などの各国の大蔵経研究者が集まった同大会において、大蔵経と関連し、言語・訳経・伝承・デジタル化（＝電子化）などに関する多くの論文が発表された。

このたびの国際学術会議では、当時に発表された大蔵経造成事業の大きなフロー（flow）（＝潮流）、および、高麗大蔵経の造成（＝制作）過程などを若干述べた上で、さらに同大会時に論議する機会がなかった内容・事項に関しても少し触れてみたい。

2 大蔵経造成の歴史

紀元前6世紀頃、インドの仏陀（Buddha、「悟った者」）の「教え」は、「苦痛からの解放」、すなわち、涅槃寂靜（Nirvana is peace）を目指すものであった。縁起・無常・空に大きく区分される彼の「教え」は、以後数世紀にわたって洗練されていく中、公式・非公式を問わず、さまざまなルートを通じ海外へ伝えられた。現存の「公式記録」によれば、その「教え」（＝仏教）の最初の海外伝播とされるのは、インド初の統一帝国を建設したアショーカ大王（転輪聖王、samrat Chakravartin、紀元前265～238年or 273～232年）による伝法使節団のスリランカへの派遣であった。しかしながら、現存する公式的な記録から、その「教え」は、その後シルクロードの行商によって広く伝えられたと推測される⁽¹⁾。また「ギリシヤ」の記録から⁽²⁾、仏教がギリシヤ文明と接し、ヘレニズムと称される東西洋文化の融合が生じていたことも確認できる。

こうした過程を経て蓄積された仏教関連資料の結集といえるものが、大蔵経の造成作業で、また、この造成作業は三つに区分される。

第一は、南伝（小乗（Hinayana）仏教、上座部（Theravada）仏教における造成事業である（**訳者注：太字は筆者による。以下同じ**）。南伝とは、口頭伝統（＝口頭伝承）、すなわち、読誦を重要視す

るものであるため、大蔵経の記録化・文字化（＝造成作業）はそれほど重視されてこなかった。いいかえれば、南伝において、大蔵経の活字化、すなわち、南伝仏教による「パーリ語聖典（Pali Cannon）」が作られるようになったのは、つい19世紀後半となってからのことである。1881年、トーマス・ウィリアム・リース・デービーズ（Thomas William Rhys Davids、1843～1922）の主導で開かれたパーリ語の聖典協会（Pali Text Society）で初めて、スリランカの貝葉経（palm-leaf manuscripts）をラテン語で記録する造成作業がなされ、「パーリ語聖典（Pali Cannon）」が制作されるようになったのである。このように、現在では、南伝の根幹と呼べる「パーリ語聖典（Pali Cannon）」の制作が、遅い時期に始まったのは、①南伝においては口頭伝承を基盤としてきたことと、②南伝の經典の量がそれほど多くなく、丸暗記できるほどの量であったことによるものであった。

第二は、紀元前後頃シルクロードを通じ中国へ伝来されたとされる北伝（大乘（Mahayana）仏教の漢訳）に関するものである。

一説によれば、中国に仏教が伝来したのは、紀元前後とされる。そこで確かな点は、東アジア地域の大蔵経の刊行・印刷の前史を見ると、まず8世紀に入ってから、木版印刷が初登場したという点である⁽³⁾。そして、972年（宋の太祖4年）から983年（太宗11年）までの11年間にわたる作業の結果、木版印刷の開宝版大蔵経⁽⁴⁾（971～983、いわゆる蜀版⁽⁵⁾、あるいは北宋版、以降、戦乱などにより消失）が完成されるようになったのである。総計1076部5,048巻にもものぼる仏経を13万枚もの木版に刻んだのち、千字文の順番に体系的に分類し、480個の函に保管されるようになった開宝版大蔵経は、986年には日本、990年には高麗、さらに、1019年には女真、1058年には西夏、1031年には契丹へと伝来したとされる。こうした同大蔵経の海外伝播以降、各国の大蔵経事業に拍車をかけるようになるが、そのスタートを切ったのはほかならぬ高麗であった。

当時、契丹の侵入に対抗し、また、仏菩薩の加護によって外侵を阻むため、また、国民総和を実現するために造成された大蔵経、正確には、初雕大蔵経は、1011年から76年もの年月をかけて、造成に至った。

一方、契丹でも、ほぼ同時期、すなわち、1031年から1054年までの23年間にわたって大藏經の造成作業が進められていた。

両者の最大の特徴とは、開宝版をそのまま板刻せずに、開宝版の中に含まれていない他の仏經の内容も含むようにしたことである。換言すれば、契丹は、開宝版大藏經の発展形ともいえる初雕大藏經を完成させたのである。ただ、残念なことに、両者ともに以後の戦乱などにより消失してしまった⁽⁶⁾。

高麗では、初雕大藏經の造成以来、教藏および続藏經が約10年の期間を要して刊行された(1091年～1101年)。

その内、大覚国師の義天によって造成された教藏における最大の特徴は、初雕大藏經には包含されなかった宋・遼・日本の經典と、三藏の注釈書である章疏が、それに書き入れられたことである。教藏の目次(目録)は『新編諸宗教藏総録』(いわゆる「義天録」)であるが、同総録には、經に対する章疏561部2586巻、律に対する章疏142部467巻、論に関する章疏307部1687巻、総計1010部4740余巻の注釈書が収録されている。しかし、初雕大藏經と同様に、この章疏もまた、1232年のモンゴル軍の侵入によって、その経板はいうまでもなく、印刷本まで消失してしまった⁽⁷⁾。

初雕大藏經と教藏の消失以降に制作されたのが、高麗大藏經もしくは八万大藏徑と称される「再雕大藏經」である。同大藏經は、現在ユネスコ人類文化遺産に登録されている。

1236年から1251年までの16年間にわたって制作された同大藏經は、総計1547部、6547巻で、経板数だけで8万1258版にもものぼるものである⁽⁸⁾。この大藏經は、漢訳の大藏經の集大成ともいわれている。

中国の金・元・明・清でもさまざまな版本が作られてきたが、それらはすべて木版印刷のものであった。だが、決して再雕大藏經を凌駕するほどのものはなかった。しかし、こうした高麗大藏經を初めとする木版印刷の時代を終わらせたのが、その後登場する日本の大正新脩大藏經(1922～1934)である⁽⁹⁾。この大正新脩大藏經は、高麗大藏經をもとにし、インドのサンスクリット經典、パーリ語の原典、中国の漢訳の經典を比較検討し、また、関連する膨大な資料を収集・整理したもので、総計110巻、3053部、11970巻にもものぼるものである。その中

には、敦煌写本1巻、図像部12巻、目録3巻などが含まれるなど、既存の木版本とは異なる特徴が認められる。

かくして、活字印刷(本)の時代が到来すると、木版本である高麗大藏經の權威は崩れていった。その結果、現在において、仏教学者は、日本の大正新脩大藏經を「底本」にしている。印刷メカニズムの発達によって誕生した大正新脩大藏經の權威は、今日ではもう絶対的なものとなっているのである。

第三は、もう一つの北伝仏教と呼べるチベット仏教である。これは、8世紀以後、インドの後期仏教をそのまま伝授したものとされる。

同仏教における最大の特徴は、インド後期における経論・注釈のすべてを包含しているため、その量が漢訳の大藏經とは比較にならないという点である。

「漢訳大藏經である大正新脩大藏經全巻(32巻)の中には、1692部のインド仙術の経論が収録されている。それに対し、チベット語訳の北京版の全巻(150巻)には、1055部の經典、3962部の論書、計5017部が収録されている。約3倍にもなる量である」⁽¹⁰⁾。

このように、漢訳大藏經と比べ、その量が3倍にも達するのは、中国には伝わらなかった密教部の經典などのインド「源流」の經典がそれに含まれているからである。

チベット大藏經における歴史は、チベットの歴史と実に密接な関係を持つが、それは、チベットにおいては、仏教が王権強化という政治的目的から導入されるようになったためである。

事実、チベットの歴史が、①前伝期(Early Period、～10世紀)、②休止期(10世紀)、③後伝期(Later period、11世紀～)に分けられるのは、そうした事情による。

少し詳しく述べると、「前伝期」、すなわち、「王の時代」(＝「法王の時代」⁽¹¹⁾)は、チベットの3代法王などが、ヒマラヤ山脈からミャンマーにわたる地域と天山山脈から中央アジアにわたる地域で、唐と軍事衝突を頻繁に起こし、征服事業を進めながら、強力な中央集権国家体制を求め、文字を創り、寺院を建立し、また、仏經を輸入・翻訳したりした時代であった。換言するならば、後代に形成されたとされるただの「不法統治時代」とはかけはなれ

た時代であったのである。

「休止期」は、前伝期の統一国家が崩壊、各地方における豪族が勃興し始めた時期である。実は、該当期間中には、これまで知られてきたこととは異なり、仏教は普及しつつあった。敷衍すると、休止期には、法王の時代の幕を閉じさせたラング・ダルマ (Lang dharma, 836~842) の廢仏事件以来、仏教は弱体化していったといわれてきた。しかし、この休止期こそが、「上から」の仏教ではない、「下から」の仏教が民間信仰として定着していく期間である。そして、以後の「後伝期」における大蔵経造成事業本格化のバック・グラウンドとなるのである。

こうした歴史的背景を有するチベット大蔵経の造成事業について記すと、前伝期における最大の作業といえるものは、①訳経事業に必要とされた「翻訳名義集」⁽¹²⁾と、②インドなどから伝来した経論を整理していく「目録 (dkar chag)」⁽¹³⁾の製作である。国家次元で進められたこれらの作業 (=「翻訳名義集」と「鄧喝目録」) は、のちにチベット大蔵経の造成において不可欠な翻訳用語の統一化ならびに体系のベース化をなしていく。

これを「土台」に、後伝期となってからは、数多くの大蔵経造成事業が進むようになるが、その形態上の特徴は、漢訳大蔵経の経蔵・律蔵・論蔵の「構造」と違い、仏説部 (bka' 'gyur) および論疏部 (bstan 'gyur) によって構成されたという点である。その内、仏説部は、経・律・密で構成されているのに対し、論疏部は、多くの論書を初め、後期に伝来した密教経典も多く含まれている。このような仏説部・論疏部の構造は、すべてのチベット大蔵経の基本骨格をなしている。ただし、地方豪族の中には、経済的事情から仏説部しか造成できない場合もあった。

チベット大蔵経は、徳格版と北京版に大別される。

その内、いまの昌都地域である徳格の王であったテン・パ・チェリ・ング (ldan pa tshe ring, 1678~1738) によって造成された徳格版は伝統があることから、また、清の康熙帝 (1684~1737) の時代に造成が始まった北京版は、伝統と便宜性があることから、現在広く使用されている。

徳格版は、現在も木版印刷され流通している。また、現代の印刷技術によって生まれ変わった北京版もまた広く流通している。かつては経論の内容のみを含んでいた北京版は、2008年より近代的な印刷

形態で製作され始めたのである。それが「蔵文中華大蔵経」である。同大蔵経は、論疏部が現在作業中であるとされる。

ここでチベット大蔵経の特徴を取り上げると、次のように言われている。

第一は、サンスクリット原文を充実させる。

第二は、異訳と誤訳を修正する。

第三は、チベット人の著書 (=注釈および訳一訳者) を排除する。

ところが、サンスクリット語とチベット語の経典を中心に訳経してきた筆者の私見からすれば、以上の内、第一と第二が可能であるとは考えられない⁽¹⁴⁾。なぜなら、サンスクリット語の形態素の変化をそのまま適応 (=訳一訳者) することができないチベット語の限界から、サンスクリット原文を充実させることと、それによる異訳と誤訳を修正することができるはずはないからである。それゆえ、同大蔵経に対しては、今後、他の板本・版本との比較作業が必要とされるであろう。

3 おわりに

仏教はシルクロードを通じ伝えられてきた。それを受け入れる形でなされたのが、大蔵経造成事業であるが、同事業は、実に一国における文化の総和ともいえるものであった。以上で論じたように、その内の南伝仏教と北伝仏教は、全人類の文化遺産として大きく評価すべきであろう。近代に至り、南伝仏教典と北伝仏教典が活字化されたことで、大衆の接近もより容易となった。その最も代表的なものが大正新脩大蔵経であった。

最近における国際的な文化交流のメカニズムといえば、それはインターネットであろう。インターネットとは、既存の空間的な制限を一気に飛び越えることを可能とする、画期的なメカニズムとして大きな意味を持つ。こうした背景のもと、高麗大蔵経研究所では、大蔵経のデジタル化に拍車をかける一方、そのソースコードを共有することに力を注いできた。日本でも、こうした時代の流れに応じ、大蔵経のデジタル化作業を試みている。また、チベット大蔵経の場合は、アメリカ仏教学会会長のロバート・サーマン (Robert A. F. Thurman) などが主導し、「論疏部訳経会議 (Tengyur Translation Con-

ference)」などを開催し、チベット仏教の英訳作業に尽力している。

今後、インターネットを通じ世界が完全に一つになるとき、大蔵経も、そうした時代の潮流に歩調をあわせ、南伝と北伝は一つに収斂し、「世界大蔵経」として出現することとなるだろう。近い将来、大蔵経の、デジタル化および「現代言語」としての再誕生を期待する次第である。

注

- (1) 仏陀が在世中、現在の北部アフガニスタンのバルク(Balkh)から中インドに出向いた際、仏陀にサトウキビと蜂蜜を捧げた礼謂(Trapusa)と波利(Bhahaika)の記録が『仏説太子瑞応本起経』に残っている。
- (2) Nakamura Hajime(中村元)(Delhi: Motilal, 1987), Indian Buddhism, pp. 90-91 参照。
- (3) 中国文化の黄金期であった唐時代の最初の木版印刷本といえる『妙法蓮華経』が680年頃、またそれ以降日本の『百万塔陀羅尼経』や、新羅の『無垢浄光大陀羅尼経』がほぼ同時期に制作されたことから、この頃が木版印刷の絶頂期であったとみることができる。この木版印刷(の技術一訳者による)は、のちの大蔵経造成作業時の技術的な土台となった。
- (4) この大蔵経の事業を主導していた宋太祖(趙匡胤)の三番目の年号(=開宝:968~976年一訳者による)から、「開宝版」と呼ばれる。
- (5) 蜀版と称されるのは、同大蔵経が蜀の地方、すなわち四川省の地域で造成されたためである。
- (6) 高麗大蔵経研究所は、韓国内に約300巻、日本の南禅寺や対馬島などに約2700巻現存する『初雕大蔵経』を復元・デジタル化しており、作業は2014年までに完了する予定である。『開宝版大蔵経』が総計5048巻であるのに対し、『契丹大蔵経』は約6000巻であったことが知られている。しかし、現在その殆どは消失してしまっている。
- (7) 高麗大蔵経研究所は、韓国・順天の松広寺、日本・奈良の東大寺に各50~60部(総計1010部)を残す『新編諸宗教藏総録』を現在調査・デジタル化している(2017年上期までに終了予定)。現在の調査によれば、『初雕大蔵経』に含まれていない現存する仏典は、国内外を含め約400部である。これら仏典が、教藏の『総録』に含まれているか否かについては現在確認中である。
- (8) 高麗大蔵経研究所は、これをすべてデジタル化し、2009年より、敦煌版、大正版などの多様な版本との比較および異体字などを、インターネットにて無償提供しており、日本と台湾の大蔵経のデジタル化を積極的にサポートしようと、そのソースコードを共有している。ホームページはhttp://www.sutra.re.kr/home_eng/index.do(英文)。
- (9) 日本は、それまで朝鮮に対し83回にも及ぶ大蔵経請求の結果、総計63部を獲得したが、経板の完成本は(結局一訳者による)入手することができなかった。世宗7年(1425年)には大蔵経の経板を要求した。
- (10) 小野田俊蔵・崔キョンチン「チベット語仏典ガイド」(韓国語)(<http://www.bukkyo-u.ac.jp/mmc01/onoda/works/Tibetan%20Buddhist%20Works.pdf>)参照。
- (11) チベット語では、チューゲー(chos rgyal)と称し、サンスクリット語では、ダルラジャー(Dharmaraja)と呼称する。
- (12) 『翻訳名義集』(Skt., Mahāvīyutpatti, Tib., sgra sbyor bam po gnyis pa)。
- (13) カワ・ペルツェク(ska ba dpal brtsegs)主導のもと、インド・チベットの僧侶が制作した三つの訳本が存在する。そのうちの一つが『鄧喝目録』と称されるこのこれ(「目録(dkar chag)」一訳者による)である。
- (14) チベットの高僧による著作としては、『蔵外文献』と称される高僧大徳の全集などが挙げられる。